
私たちの価値 (上) 絶望の少女と希望の少年

雫月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たちの価値 (上) 絶望の少女と希望の少年

【Nコード】

N8900V

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

ある暑い日の学校で、少女は授業中に居眠りをしてしまう。彼女が次に目覚めた場所は暗く冷たい場所。周りには同様に集められた人々。

意味もわからず戸惑う人々に、見知らぬ男は「実験」の開始を告げた。実験の意図も分からずふるい落とされていく人々。後戻りのできない実験の先に明かされる彼女たちの現実。

少女は現実を受け入れ、目に見えぬ敵に宣戦布告する。それがどんなに無謀な事だとしても。

同作者作「Black Book for Busters 絶望
と希望の少女」へ続く物語の発端。

第一話 始まりの場所

第一話 始まりの場所

少女は真っ暗な世界に居た。何も見えない中で、知らない言葉だけが彼女の耳を通り抜ける。

少女は必死に音声を認識しようにも、理解できない。それは地球上のどの言語にも属さないのではないかと思われた。彼女が何故ここに居るのか、こんな状態なのかはわからない。気がついたらここに居るだけ。

「ここは何処なの。ねえ、ここは……。」

直後軽快な音とともに視界が反転した。

頭部への衝撃と共に少女は目覚めた。体の感覚が戻ってくる。机に寝ていたらしい。起き上がると眼の前には教科書を持った女の先生が。ああそうか、今は授業中なのか。暑いから眠ってしまったようだ。少女は起きていない頭を使いながら周りを認識していく。蟬の鳴き声がどこからか聞こえてくる。

「ほら、授業中寝ないの。」

先生は少女が起きたのを確認すると黒板前に戻っていった。

「春香。授業中なんだから寝ちゃ駄目だよ。」

背後からは友の声。少女は春香。真鍋春香だ。

春香は乱れた髪を直しながら前方を見た。今も授業は続けられている。黒板にはびっしりと文字が書かれていて、脳が理解する事を拒んだ。それよりも夢の事が気になった。彼女は夢の内容を覚えている。何故あんな夢を見たのだろうか。あれは、何だったのだろうか。

目の前では先生が必死に今日の授業内容を生徒に説明している。いや、必死になっているのは生徒に教えるためではなく、上手く説明出来たことを証明したいためか。噂によれば先生には教科書以外

に授業を教えるための教本があるそう。

生徒にとっては先生自身の言葉か教本の言葉かなんて関係ない。ただ、必要なことを覚えて、実践できるようにするだけだ。何故そうしなければならいかなんて分からない。

全部の授業が終わる。ある人は部活動へ、またある人はそのまま家に帰宅する。

春香は鞆を机から引きずり落として教室を出た。一日に必要な教科書の量は一時期少なくなった。しかし、結局は増えて元通りである。国のお偉い人が馬鹿だと国民も馬鹿になりそう。いや、その逆が正しいのか。

外はまだ太陽の光が辺りを熱していて暑い。何もしなくても、自然と汗が出てくる。立ち止まるのも何なのでさっさと家に向かって歩いた。

あとは家に帰って宿題を消化して、次の日の準備をするだけ。ただ、それだけだ。

陽が昇った次の日。暑さだるさが身に染みる。今日も同じく授業。合間にある体育のありがたみが分かる。暑い日のプールは気持ちいい。飛び込む水の中、この時期だけは冷水を頭からかぶっても平気だ。

とはいえ体育後の授業。これが一番厄介。体力を使ったためか、クラス中に眠気が襲ってくる。目に留まるクラスメイトすべてが眠そうに授業を受けている。

春香も必死に眠気をこらえて授業を受けていた。時計を見ればもうすぐ終わる。もう少しで休み時間だ。休み時間なら眠れる。気が緩んだその時、急激な眠気が春香を襲った。寝てはいけないと、顔を叩いて必死に目を覚まそうとする。遠くで先生の声が聞こえる。抵抗むなしく視界が歪み、そのまま暗転した。

薄暗い部屋の中。ディスプレイの明かりだけが部屋を照らしてい

る。ファンと外部記憶装置の読み書きの音が聞こえる。

「よしよし。これで実験はおしまいだ。」

ひげで顔の半分が覆われた男はディスプレイに表示された情報に目を通す。キーボードを操作して結果を印刷した。彼は印刷したプリントをまじまじと見た。実験対象一覧だ。

「やっぱり情報通信技術研究所のやつは良いな。本気になってやっている奴が居るだけのことはある。」

気持ち悪い笑みを漏らしながらプリントを机に投げた。彼は、すぐにEメールを書き始めた。内容は頼まれていた実験は終了したとの報告と実験結果だ。Eメールを送ると投げておいたプリントを眺めた。部屋に低い笑い声が広がる。

「さてと、お遊びはやめて本当の実験に移ろうか。」

男はリストを指でなぞっていく。今回実験対象にしたものたち。

しかし、男がしたかったのはこんな実験では無い。

「お前たちが何なのか私がじっくり調べてやる。」

キーボードを操作してコンソールからプログラムを走らせる。ディスプレイの画面は切り替り、石で出来た薄暗い部屋が映しだされた。

男はさらにキーボードを操作すると、部屋の中に沢山の光が生まれる。その光はだんだんと人の形をさはじめた。

「さてと、準備は整った。始めようか。」

男はリターンキーを押した。

春香は目覚めた。横たわるは固く冷たい床。体をさすりながら上体を起こす。薄暗い中、周りには見知らぬ複数の男女。まだ彼女と同様に現状が理解出来ないようだ。

春香は立ち上がる。触れた手はひんやりと冷たく、床は石で出来ているようだ。同じく壁も石で出来ているらしい。四方を壁に囲まれ、出入口が見当たらない。ここは、どこだろう。何故、ここに居

るのだろう。必死に記憶をたどっても学校に居た時の事しか思い出せない。

はっとして春香は自分の体を見た。着ているのは制服では無く、お気に入りの服。じゃあ、どこかで着替えたのか。何がなんだかさっぱりだ。彼女は頭を掻く。

「おい、ここから出せよ。」

誰かが壁を叩いたり蹴ったりしている。それは波及して人数を増やしていく。その時理解した。部屋にいるのはざっと学校のークラス分の人数だ。いや、数えていないので正確にはもっと居るかも知れない。

直後、どこからかノイズの混じった音が聞こえてくる。どこかにスピーカーがあるのだろうか。しかし、周りを見てもそれらしいものは無い。

「何処から聞こえているの。」

すこしばかりホワイトノイズが聞こえると、直後男の声が聞こえはじめた。

「ようこそ。始まりの場所へ。」

声が聞こえると部屋に居る男女が騒ぎ出す。ざわざわと耳障りな音をする。

「なんだよこれ。ここから出せよ。」

「なんで私たちここにいるのよ。こっから出して。」

みんな、現状がわかって居ないのだ。春香も同様にわかっていない。噴出する怒りが部屋中に響き渡る。煩くて気持ち悪い。

「君たちは選ばれたんだ。ある実験をするためにね。」

すると、壁の一つが動き出し。その先に明かりのない闇の世界が現れた。

「ルールは簡単だ。幾つかの部屋を通って、この建物から出ること。ただ、それだけだ。それと君たちにプレゼントがある。自分の腕を見つると良い。利き腕では無いほうだ。」

男の声で各人はそれぞれ腕をみる。すると、全員に白い腕輪がつ

けられていた。この腕輪は何なのだろうか。それに何故利き腕を知っているのだろうか。

「これって、何を意味するの。」

一箇所に固まっていた女性グループの一人が言う。あまり良いものでは無いと思う。

「私は教えない。いずれ分かるかもしれない。ちなみにそれ自体が君たちに影響を与えることは無い。安心したまえ。」

先ほどまで闇の世界だった空間に手前から順に明かりが灯っていく。長く続く通路のようだ。

「さてと、そろそろ始めてもらおうか。幸運を祈るよ。」

男の声は聞こえなくなり、部屋に居る人の声だけになった。みんな口々に不満と怒りを吐き出した。何故、私たちがこんなことをしなければならぬのかと。

春香は通路を見る。この先に行けということだろう。見たくもない夢を見ているようだ。これが夢なら早く覚めて欲しい。しかし、体の感覚はある。夢では無いのだ。

春香や部屋に居る人達はじっとしていても意味無い事を悟り、それぞれゆつくりと歩き出した。他に行く場所が無いのだ。押し出されるように今居る部屋を出た。全員が出ると先ほどの部屋の扉は閉められた。開けようとしても開かない。もう、後戻りはできないということだ。

「ほら、そのあんた。こっちなさいよ。一人で行動するなんて危ないじゃない。」

春香は先ほどの女性グループに入る。面倒が起きないように固まっていたほうが良い。グループ内を見渡すと、見た目による年齢差は様々だ。どのように選ばれたのか、どこから来たのかさっぱりわからない。

春香たちは何を試されているのか、腕輪は何を意味するのか。彼女は悪いことが起きない限り、何も分からないような気がした。

第二話 選別

第二話 選別

最初の部屋から真っ直ぐ伸びた通路を歩くと、次の部屋があった。いや、正確には最初の部屋と言うべきか。

春香は押し出されるように部屋に入った。見えてきたのはテニスコート三枚分の大きな部屋。しかし、それは金網で区切られ、進む道は決められている。

細くなった道に一人ずつ入っていく。ここからは一人ずつ進まなければならぬようだ。

進む道の床にはところどころ鉄の板ある。その床に一人ずつ乗って行く。

「何あの気持ち悪いの。何なの。」

金網の外を動きまわるのは沢山の目玉。宙に浮いた目玉は絶えず動き回りながら通路を歩く人々を見ている。道は途中で二手に分かれ、まるで商品のように振り分けられていった。

春香は押し出されるように金網で出来た部屋に入った。詰め込まれていく人々。金網の周りを目玉が飛んでいる。

春香が二手に分かれた反対側を見れば同様に金網で囲まれた部分に分けられた人々が詰め込まれている。何が何だかさっぱりだ。

金網で出来た部屋はそれぞれ出口へ道が続いている。何故ここで集める必要があるのだろうか。

その時、どこからかノイズの混じった声が聞こえてきた。

「さて、ここが第一の部屋だ。君たちはこの部屋で、二手に分かれて集められた。これはある基準で分けられている。」

春香は同じ金網に集められた人を見回した。男女どちらもいるし、特に変わったところは無い。対して反対側の金網の人々を見てみた。金網が邪魔で良く見えないが、こちらと変わらないように見える。

どのように分けられたのか謎だ。

「基準については控えよう。君たちに言っても意味が無い。さあ、次の部屋へどうぞ。」

男の声がすると、出口に続く道が開いた。少なくとも春香が居る側は開いたようだ。みんな恐る恐る通路を通って部屋を出て行く。

春香は人に押し出されるのは懲りたので、一番最後に出るように待った。一緒に行動することになった女性グループも他の人に譲っている。反対側の金網を見れば何か言っているようだがここからは聞こえない。誰も出口には行っていないようだ。

春香たちが金網を抜けて出口を出ようとする。ふと、反対側の金網に居る人たちを見た。彼女背中に電撃が走り、その場で動けなくなった。彼らの目を見てしまったからだ。何も言わずじっと見る彼らの目には、彼女をその場に留めるだけの力があつた。

「ほら、早く行くよ。」

春香は同じグループの女性に引っ張られて部屋を出た。部屋を出るとすぐに扉が閉まった。啞然とする人々の中で、彼女は扉を開けようと試みる。だけど、開かない。男の力を借りても開かなかった。部屋の中から何か聞こえる。叫び声だ。泣き声も混じっている。

金網の部屋に詰め込まれ、出口への道は閉ざされた。どうということだ。彼らは次の部屋に行けないのか。

男性陣がなんとか扉を開けて再び中に入ったとき、そこにあつたはずのものは消えていた。金網も、集められた人々も何もかも。ただ、テニスコート三枚分の大きな部屋の中心に幾つもの腕輪が積み上げられていた。

「ど、どういうこと。どこに行っちゃったの。」

春香は積み上げられた腕輪の前で崩れた。これは彼女が付けているものと同じ。つまり、この腕輪は誰かが付けていたものだろう。

「何が起きたって言うの。なんなのよこれ。」

こんな簡単に人が消えるのか。彼らはどこに消えたんだ。

春香が震える手で遺された腕輪に触れようとする。彼女は腕輪の

一つに触れる。積み上げられた腕輪は一瞬光ると、跡形もなく消えてしまった。

驚く春香の肩を誰かが叩く。振り返れば一人の女性。確か、女性グループに誘ってくれた人だろうか。

「先に進みましょう。こんな所で立ち止まっちゃダメよ。」

女性は手を差し出す。春香は手を掴んで立ち上がった。早々に何も無くなった部屋から出る。

「ほら、さっさと行くぞ。」

男性陣は早く先に進みたいようだ。その口調から、今眼の前で起きた事が嘘みたいに見える。他人のことなんて興味ないということだろうか。

一緒に行動している人数は半数近く減った。同じ女性グループに居た人も覚えるまもなく何人も消えただろう。

全員が無言で通路を歩く。ただただ足音だけが通路を満たした。

ふと、前を歩く人達のペースが落ちていることに気がついた。前を歩く人々の顔を見れば、光のない暗い顔をしている。まるで、前方に存在するであろう部屋が春香たちを無理矢理引っ張っているようだ。

立ち止まったらここから出られない。前に進むしかないのだ。

第三話　生きるという瞬間

第三話　生きるということ

変化の無い通路の先に、三つ目の部屋が現れた。先頭の男は扉に触れる直前で動かなくなってしまった。傍の人が声をかけているが反応が無い。仕方なく別の人が扉を開けて先に進んだ。

春香は固まった男性の隣を通り過ぎる。まるで彫刻のように固まった姿は人間に見えない。まるで粘土か何かで出来ているように思えた。

部屋は広く先程の部屋と同程度だと思う。

「ちよつと、どういうことなの。開けて、まだ人が居るのよ。」

春香が振り返れば扉は閉じられていた。彼女は見ていないが、固まった男性の傍に居た何人かが部屋に入れず取り残されたようだ。女性が何度も扉を叩いている。

「なんなのよこれ。どうしてこんなことに。」

女性がその場に崩れると、扉はあっさりと開いた。扉の先にはただ腕輪が転がっているだけ。それらも消えてしまった。

意味も理由もなく彼女たちは消されていくのだろうか。しかし、何のために。

その時、どこからか男の声が聞こえた。最初の部屋で聞いたあの声だ。

「さあさあ、立ち止まっただけでは時間が勿体無いよ。私にも時間が無くてね。さっさと先に進んで欲しいんだ。」

この男は何様なのだ。みんなを勝手に集めて勝手に消していく。彼はなんなのだ。

「私は神だよ。お嬢さん。」

春香はびくつきとして意味もなく辺りを見た。男は確かに春香の問いに応えた。思っただけの事なのに、口に出していないのに。どう

してわかったのだ。彼女は無意識に後退して壁に背を付けた。立っていない。

「これからはもっと滞り無く進んで欲しいね。そうそう、この部屋から先はみんなに色々と見てもらうよ。素直に反応することが先に進める秘訣だよ。それじゃあね。」

一気に言い終えると、男の声は消えた。

突如部屋中を満たす良い匂い。これは料理だ。母親が作ってくれたあの……。

次の瞬間、匂いの発するものが目の前に現れた。パンとシチューだ。春香はその場に座り込み、恐る恐る触れてみる。皿は熱を持っている、湯気を立ち昇らせている。

「温かい。美味しそう。」

周りを見ればみな座り込み、料理を目の前にしている。

春香はスプーンでシチューをすくってみた。匂いを嗅いでみる。特に変な匂いはしない。目を瞑って一気に口に含んだ。突如熱い液体が口内に広がる。あまりの熱さに声が出た。

春香ははっとして周りを見ればみんな見ている。最初に食べたのは彼女らしい。彼女は大人数からの視線に慣れていないためか固まってしまった。固まる彼女をよそに、各々が料理を食べ始めた。

春香はひと通り食べ終わると皿を置いて深呼吸した。食べてしまった。誰が作ったかも分からないものを食べてしまった。お腹を壊したらどうしよう。いや、今はそんな事を考えてもしたかがない。仕方が……。

背後で金属音がする。春香がすぐに振り返れば、腕輪が床に転がっていた。傍には手付かずの料理。また、誰かが消えた。

別の場所から悲鳴が聞こえる。これで二人消えたらしい。一体どうして消えてしまうのだろうか。春香も、何時か消されてしまうのか。

しばらくすると独りでに扉が開いた。お腹を満たした人々は部屋を出て行く。残されたのは二つの料理と二つの腕輪。それらも、跡

形もなく消えてしまった。

「ほら、あんたも早く来なさいよ。」

誰かに呼ばれて早々に部屋を出た。

また、通路を歩く。代わり映えのしない世界。この先にまた部屋が現れるのだろう。そして、誰かが消えて行くのだ。行きたくないが行かなければ終わらない。ただただ、進み続けるのだ。

四つ目の部屋が現れた。扉を開ければ体育館ほどの広さ。先に続く扉は見えない。

「上見ろよ。おい、何だあれ。」

春香は誰かの声で見上げた。順に灯る光の中に何か見える。あれは、扉か。扉から部屋の中央に向かって床が飛び出している。

扉と床を見つけたからといってここからはどうやっても辿りつけない。例えば床が上昇するとか。何か梯子が出てくるとか。

春香は素早く周囲を見た。何か嫌な予感がする。行き止まりの部屋、宙に浮いた出口と床。まさかこれは……。

一際大きな音が部屋に反響する。石と石をすりあわせた音だ。そして、眼に見える形でそれは現れた。石の壁が両側からせり出してきたのだ。いや、せり出してきただけなら予想出来た。問題はそれが一部だけでゆっくりということだ。これでは簡単に避けられる。高いところにある壁も一部せり出してきた。両側からせり出した壁がぴったりとくっつく。そのままなのかと思ったら勢い良く空気の抜ける音がして、接触した一部の石を除いてそれ以外は壁に引っ込んだ。残ったのは黒く四角い棒。平均台に見える。それが中心にある正方形の石と両側の壁を繋いでいる。

そんな平均台がせり出した壁の数だけ出来上がる。

次に現れたのは平均台を繋ぐ階段。これは平均台の間にある壁がせり出して出来た。平均台と宙に浮いた床の間にも同様に階段が現れる。これら階段の出現によって一つの道を出来上がった。行き着

く先は、宙に浮いた床と出口。

「こ、これを通して行けって言うの。なんなのよ、何でこんな事しなきゃいけないのよ。」

出口への道は細く、落ちたら下は石の床。下手をすれば死ぬ。何故こんな危険な事をしなければならぬのだ。

「危なくなったら平均台を掴めば落ちないだろう。やるしかない。」
気がつけば、男性グループが階段を登り平均台渡り始めていた。

怒っても何も変らない。誰かが助けに来てくるなんて期待できないんだ。だったら、先に進むしかない。

一つ目の平均台は身長よりも高い位置にある。平均台から床まで目視で2メートルほどだろうか。二つ目以降はそれに階段の高さが加わっていく。

その時、悲鳴とともに鈍い音が聞こえた。平均台を渡っていた男性数名が落ちたのだ。彼らはぴくりとも動かず、そのまま消えてしまった。

「平均台に触れるな。触れたら回転しやがった。」

触れたら平均台が回転したらしい。回転すればバランスを崩して真逆さま。男性たちの考えた落下防止策がかえって危険な状況を作りだしてしまった。立ったまま進めということらしい。

平均台に触れば回転して落ちる。人間というのは誰もが同じような考えを思いつくもので、階段のところに居ながら平均台に触れる男が現れた。

結果は平均台に乗っていた人間全員が落下。平均台に触れた男は何が楽しいのか気持ち悪い笑いを周囲に振りまいている。まとまりのないこの場の全員がさらにバラバラになるのは簡単だった。やられたらやり返すように、落とし落とされる光景が続く。他人を疑い、恐怖して自ら落ちて行く者も後を絶たなかった。

春香は未だ床から上空に掛けられた平均台を見ていた。こういうものは最後まで参加しないことにしていた。勇気がないともいえるが、我先となる中に入っていくのが面倒だからだ。

「待って、みんな落ち着こうよ。このままじゃ全員ここで終わりよ。」

春香の言葉は階段を登った者には届かない。今は生きるか死ぬかの最中なのだ。床に残っている人の中には何人か反応してくれたがそれだけだ。

春香が何も考えず天井を見ていると。歓喜の声が部屋中に響きわたった。

「よっしゃクリアしたぞ。やった。」

最初に平均台を渡り始めた男性グループの一人のようだ。春香からはすごく遠い存在に見えた。あの場所に行けるのだろうか。

「ほら、あなたも早く来なさいよ。置いて行くわよ。」

ふと気がつけば床に居るのは春香だけになっていた。みんな階段か平均台の上に居る。一人ずつ平均台を渡り、残りは階段で待機。疑心暗鬼にならず相手を信頼すれば渡りきれるのだ。もし、バランスを崩して平均台に触れてもしがみつけば落ちない。その状態で反対側に渡りできれば良い。

春香も最後まで残った女性グループと一緒にこの細い道を進んだ。平均台というのは学校で行う分には良いのだが、いざこのような状況で行うと非常に疲れる。それは神経を研ぎ澄ませながら進むからだ。ほんの少しの体重移動が悲劇を招く。平均台を掴んで進む事もできるが、体力を奪われる上に目が回る。

春香は平均台のひとつを渡りきって階段に座り込んだ。これで何本目だろうか。残り平均台本数を数えるのも出口を見るのも止めた。残り本数に愕然とし、一步も動きたくなくなるだろう。平均台の上で立ち止まると、いっそ落ちてしまいたい気持ちになる。その時は先に渡ったグループの人が声をかけてくれた。それで何とか再び動き出した。お互い名前もよくわかっていないのに優しい。

春香が足のすくむ高さまで来ると、精神的にも体力的にも限界が近づいてきていた。平均台を渡ると休み、休むと渡るの繰り返しだ。高所恐怖症なので心まで削られていくような気がした。

「手触れるなよ。触れるなよ。」

一つ上の平均台の所から聞こえた。男性が渡っているところらしい。自分を安心させるために言っているようだ。

「それは振りか。振りなのか。」

春香の位置からは見えないが、他の男性が声をかけている。なんだか楽しそうだ。

「そんなわけねえだろ。」

男性たちの笑い声が聞こえる。当初の空気とは違い、お互い声を掛けながら進むようになっていた。独りじゃないというのはこの場合凄く大切だと思う。

春香は何度も休憩を挟みながらすべての平均台渡りきった。最後の平均台を渡って階段に到達したとき、全身の力が抜けてその場に倒れてしまった。

「次の部屋で休めるよ。こんな所で寝てないでさあ立ち上がって。」先に進んでいた人が戻ってきて手を差し伸べてくれた。春香はなんとか立ち上がると、宙に浮かんだ床を通して扉を開けた。

扉の先はまた部屋だった。この部屋は天井が高く、壁一面に沢山の扉がある。それらは階段や廊下でこの部屋と繋がっている。

「おやおや、やっと最後の一人が来たね。」

春香はどこからとも無く聞こえてきたあの男の声に周りをしきりに見た。そろそろ姿を見せろと言いたい。

「お疲れ様。疲れただろう。好きな部屋に入ってゆっくり休むと良い。空いているのは扉のプレートが青いものだ。時間が来たら教えるよ。じゃあね。」

「ちょっと待って。どういふことよ。私たちに何がさせたいの。」

一緒に居た女性が止めようとしたが構わず続けた。

「私たちが何したっていうのよ。なんで、こんな事しなきゃいけないのよ。」

どうしようも無い気持ち体が満ちた。何故こんな事をさせられているのだ。

「君はよく出来ている。だから、最後まで残って欲しいね。」

「ちょっと、それどういうこと……。」

男の声はそれ以降聞こえなくなった。春香は仕方なく一緒にいてくれた女性を見る。

「それぞれの扉の先に一人用寝室があるわ。先に着いた人はみんなどれかの部屋に入ってるの。じゃあ、私も行くわね。」

それだけ言うと女性は自分の部屋に戻っていった。一人取り残された春香は壁にある扉を見た。幾つぐらいあるのだろうか。いや、今は疲れたので休もう。

春香は近くにあった空いている部屋に入った。彼女は室内に入って驚いた。部屋はまるでホテルの一室のようで、お風呂場もトイレも完備されていた。まるで扉一枚で世界が違ふような気がした。

春香はそのままベッドに倒れた。ふわりと良い匂いがする。

今日はもう休もう、難しい事は後だ。

第四話 世界

第四話 世界

どこからか目覚まし時計の音が鳴っている。春香が何時も使っているものだ。どこにある、どこだ。何度か探してみるも見つからないので仕方なく目を開けた。

「おはよう。よく眠れたかな。」

男の声が聞こえる。世界は相変わらず真っ暗だ。

「朝食を用意した。準備が出来たら中央の部屋に来ると良い。」
途端に部屋の灯りが付いた。身支度を済ませると、部屋の中に料理が載せられたカートが現れた。先程まであったもののか現れたのものなのかわからない。いや、もう気にしないほうがいい。気にしたら疲れるだけだ。

春香が食事を終えて部屋を出れば中央の部屋には何人か居た。自分の部屋に戻ってもすることが無いので階段に座ってたただ他の人たちを眺めた。時間が経ち徐々に人が増えるものの平均台のあった部屋の時よりも明らかに人数が少ない。かなり減ったということだろうか。目視で十数名しかない。

「さあ、集まったようだね。さあ、今日も元気に始めようか。」
意味もわからずただ生き残るために部屋を通るのだ。そこでどんな事が起きるとしても。

次の部屋に入ったとき、ふわっといい匂いがした。食べ物では無い。もっと良い香り。香水だ。

次の部屋はこれまでとは違ってデパートのワンフロアのような所。その中には沢山の衣類やアクセサリー類がある。

「ここには沢山の服やアクセサリーがある。好きな物を選んで先に

進んで欲しい。選んだら次の部屋で着替えて先に進むんだ。自由に選んで良いよ。」

人々はすぐにフロアに散らばった。春香も近い所から順に見ている。沢山あってどれを選べば良いか正直わからない。ふと、値札を見れば気を失いそうな値段が付いている。

「そうそう。値札が付いているかもしれないけど気にしないでいい。全部タダだから。それと、次の部屋には幾つでも持って行っているよ。着られる量は決まっているだろうけどね。」

言われて値段を確認する人がちらほら。春香にとって未知の世界だった。選び放題の中でフロア中を歩きまわる。フロアには鏡と買いたい物かごが適度に配置され、選択をサポートしてくれる。フロアは意外と広くていくら時間があっても足りない気がした。

気がつけばフロアには男性陣は居なくなり、女性ばかりになっていた。昨日から時間感覚が狂っている。今何時なのかどのくらい経ったのか分からない。最後に出るのも良くないのでかごの中身を確認してフロアを出た。

春香が次の部屋に入り扉を閉めた途端。扉から金属音が聞こえた。試しに開けようとするが開かない。まだ彼女の他にも居たはずだ。

「なんなのよ。何が基準なのよ。」

春香が扉を押したり引いたりしてみるものの全く動かない。何故彼女が次の部屋に行けて、残っていた人たちがこの部屋に来れないのだ。

「また君が最後かい。早く着替えたほうが良いよ。」

何処からか男の声がする。この男は一体何を何の基準で行っているんだ。

「あんたな……。」

春香は嘖きだした言葉を飲み込んだ。ここで言っても何も変わらない気がした。不思議がる男を無視して言われたとおりにした。

部屋を見渡せば、両側に沢山の仕切りがあり、この部屋はただ着替えをするためだけに存在しているように思えた。左が男性、右が女性で、それぞれ個室になっているようだ。のぞき見防止だろうか。次の部屋への扉は目の前にあるが、開かない。彼女は仕方なく言われたとおり着替えた。

春香はこの際なのでドレスのような派手なものも考えたが、それを来て何をするのかという考えに至った。暑いので結局水色のワンピースというあっさりな形に至った。あとは靴と時計とネックレス。母親は居ないし、何時終わるか分からないのだから好きなようにしたい。

部屋には大きなゴミ箱があった。この中に脱いだ服を入れろということらしい。大きなゴミ箱は余った服を飲み込んでいく。

次の部屋に進む春香。身なりが変わっても何も代わらないような気がした。

春香が次に入った部屋はとにかく豪華だった。まるで、中世のパーティー会場。いや、本当にそうなのかもしれない。本やテレビで見たことのある世界がそこに広がっていた。ドレスやタキシードを着た沢山の人が踊っている。彼女は格好が場違い過ぎてその場から動けなかった。何故こんな服を選んだろうと思ってしまう。近くの壁に張り付いてただただ眺めていた。一緒に部屋を通ってきた人を探せば簡単に見つかった。同じく場違いな服を着ているからだ。それでも、給仕から飲み物を貰って飲んだり、周りの人と話をしていく。場違いなりに溶け込もうとしているようだ。

良く見てみれば踊っている人たちは春香たちの事なんて気にしていない。ただただ自分たちの世界を楽しんでいるように思えた。

「さあ、みなさんそろそろ……。」

部屋の中で、一番偉そうな人がみんなを誘導して別の部屋に連れて行ってしまった。大きな音を立てて扉が閉まる。残ったのは他の

部屋から来た人々のみ。人数はもう数えられるほどだった。たった八人だ。

人が多くて気が付かなかったが、部屋には扉が三つある。入ってきた扉とみんながぞろぞろと出て行った扉。そして、もう一つの扉。みんなが出て行った扉は開かなかった。春香はもう一つの扉に手をかける。引いてみれば案外すんなりと開いた。

「あの子行っちゃった。付いて行っちゃった。」

残った人たちが部屋を出て行く中、しゃがみ込んで頭を抱える女性。話を聞けば、先ほどの移動でそのまま他のみんなに付いて行ってしまった人が居るそう。彼らがどうなったか分からない。ただ、目の前から消えてしまっただけだ。

春香は女性を立たせると一緒に部屋を出た。残りの人たちは部屋の外で待っていた。

「もう、俺達だけか。」

今や数えられるほどの人数になってしまった。

「なんなのよもう本当に。どうしてこんなことしなきゃいけないのよ。」

残った春香たちと消えていった人たちに何の違いがあるのだろうか。

「このままじゃ全員消えちゃうぞ。あの野郎何がしたいんだ。」

男が通路の壁を思い切り叩く。春香も怒りたい気持ちでいっぱい。だけど、どう怒れば良いか分からない。だって、本人が目の前に居ないのだから。

春香たちは次の部屋に入った。目に飛び込むピンク色の世界。派手な装飾が施された部屋は薄暗く、その場にとどまり難い印象を与えている。

「なんなのこれ。趣味悪い。」

微かに香水の匂いがする。この部屋は何なのだろうか。

「ここまで来たのは君たちだけかい。」

突然あの男の声が聞こえてくる。探しても見つかるものでは無いが、春香は反射的に周囲を見てしまう。

「そんなに私の姿が見たいかい。」

男の声の後、部屋を中心に白く光り始めた。春香は眩しさに顔を背ける。光が消え、再び部屋の中を見たと一人の男が立っていた。「うん、なかなかだね。現実と区別がつかない。しかしこれは……。」

男は体を動かしながら独り言を言っている。

「ひっ、人が現れた。どっから来たんだよ。」

男は体を動かす事をやめると、春香たちを見た。

「何処から来たと言われれば、神の世界とでも言っておこうか。それにしても……。」

男は春香たちを一人ずつ見ていく。まるで商品を見ているような。そんな印象を受けた。

「ここまで来たのは君たちだけなんだね。まさか一桁だとは思ってなかった。もう少し居ればこの実験も出来たのに。まあ、いいか。」

春香は男の言葉に怒りを覚え、ただ吐き出すように言い放った。

「あのさ、聞きたいことあるんだけど。あんた何なの。なんで私たちがこんな事しなきゃいけないの。」

春香の声が徐々に大きくなる。その声をかき消したのは男の笑い声。

「君たちはやっぱり人間だね。これで実験はおしまい。君たちが人間かどうかの実験だよ。」

「人間かどうかって。私は人間よ。今まで見てきた人たちだって同じ人間だったわ。一体何が違うのよ。あなたこそ神の世界とか言ってる頭おかしいんじゃないの。」

目の前に居るこの男が神だというのなら、神などという存在は誰にでもられるのではないかと思えるほどだ。信じがたいの一言だ。

「頭がおいしいか。あはははは。流星はミスター・アラタニの子供

だ。その思考回路に恐怖を覚えるよ。」

「だから……。」

「もう、実験は終わりだよ。君たちは用済み。消えていただこう。」
春香は言葉は男の声で遮られた。男が手で宙を切ると背後で聞こえるうめき声。床に倒れる女性。すぐに跡形も無く消え去った。

「ちょっと待って、だから何故なのよ。何故私たちがあんたの実験に参加しなきゃいけなかったの。みんな何処行っただけだよ。教えてよ。」

春香自身にもどうすれば良いか分からない。目の前で起きていることがあまりにも現実離れしている。気が狂いそうだ。

「そう言われてもね。君たちが被験者として提供されただけなんだ。ここに辿りつけなかった人たちはただ消滅しただけ。」

「提供されたって何よ。消滅したって何よ。何でこんな事するのよ。同じ人間でしょ。」

「同じ人間だって。」

男は笑う。部屋中を満たす笑い声。春香は馬鹿にされたと感じて、男を睨みつけた。

「君たちからはそう見えるだけだよ。他人とは自分から見える対象。本当の他人というのは分からない。それに見た目は同じでも君たちと私とでは何もかも違うんだよ。」

「だから……。」

春香はもう呆れ気味に言おうとした。その言葉を男は制止する。

「君達は余分に増えた自己の分身だ。本体さえ居れば大丈夫なんだよ。」

「本体って、どういうこと。」

予想していなかった言葉に春香は黙りこむ。もう何もわからないような気がしてきた。

「だから、君たちは誰かのクローンなんだよ。もう、元の生活になんて戻れないんだ。」

「わからないわ。そんなの信じられるわけ無いでしょ。どうしてそ

んな事になるのよ。」

春香自身空しい抵抗だと思っている。それでも言葉を出さないと何もかもが消えて無くなりそうなそんな気がした。

「我々は君たちの知っている人間じゃない。神と呼ばれる人間なのだよ。そして、君たちは我々人間が創りだした別の人間ということさ。」

春香は何度も首を横に振る。必死に受け入れようにも受け入れられない。

「理解出来ないわ。別の人間ってどういうことなのよ。あんたと私で何が違うっていうのよ。」

「別の人間っていうのは別の人間さ。私が考える人間と君が考える人間が違うだけの話だよ。しかし、本当に君は出来が良い。まるで同じ人間と話しているようだ。消すのが本当に勿体無いな。」

少々悩む男。ぶつぶつと何か言っているが春香のところからは聞き取れない。

「ひと思いに消してやりたいが気が変わった。君たちに新しい世界を提供しよう。」

男はしばらくの後顔を上げると、春香たちを見回した。男は背後にある扉をノックした。独りでに扉が開く。春香の位置からは扉の先が見えない。

「さあ、ここから先は君たちの自由だ。この扉の先に住むか、今ここで存在を消されるか選ぶと良い。」

選択の余地など無かった。全員が扉から部屋を出る。その先は真っ白い世界。ただ背後に扉があるだけ。

「君たちの邪魔はしないよ。けど、人数が少ないからもう少し増やすかもね。」

扉は静かに閉じられた。次の瞬間、空間に色がつき、世界が現れた。突如体を突き抜ける轟音。

扉の先は時計台。真上で鐘が鳴っている。鐘が鳴り止み、春香はふと辺りを見回す。西洋の街並み、その先にはどこまでも続く青い

海。背後にはそびえ立つ山。辺りを見回しても人一人居ない。本当に彼女たちだけのようだ。

「俺たちは生きている。ここでまた始めよう。」

誰かが言う。受け入れられないものを無理矢理受け入れながら、彼女たちの世界が始まる。

第五話 絶望の少女

第五話 絶望の少女

春香は新しい世界に馴染もうとした。幸い生活に必要な道具は最初からあり、海や山には食べられる生物がいる。田畑も作れた。

しかし、春香は何日も何も食べず動かなかった。すべてが嫌になったのだ。この世界も自分の存在も。

心配になって食事を持ってきてくれる人も居た。部屋の隅でただ一点を見つめる日々。すべてが夢であり、あの学校の教室で先生に起こされないかと思った。

「あの日に、戻りたい。」

飲まず食わずで数日たった。流石に危ないと一緒に来た人たちが春香を部屋から引っぱり出して無理矢理食事をさせた。

春香は死ねなかった。死ぬことが出来ず、生きる理由も無かった。本当にどうでも良かったのだ。

春香は何もせずずっとベッドで眠り続けた。

『あんた本当にこれで良いの。何もせずに死んだら負けだよ。』

真っ白な世界で、誰かの声が聞こえる。誰だろうか。周りを見回しても誰も居ない。でも、はっきりと聞こえた。この声をどこかで聞いたことがある。どこだろう。

『あんたは生き残ったんだ。簡単にこっちに来ようと思うな。』

また別の声。どこから聞こえてくるんだろうか。探そうにも声の主は見えず、ただ変化を待つのみ。

『あんたに俺達の希望を託す。あんたの絶望はここに置いていけ。預かってやる。』

背後から声が聞こえる。先ほどよりも春香に近い。

『ちよっと待って。あなた達だれなの。どこに居るのよ。』

虚しく響き渡る春香の声。世界の色は反転し、見慣れた天井が現

れた。夢を見ていたらしい。夢なのに数秒前の事がはっきりと思いつける。希望とはなんなのだろう。いや、夢なのだから気にしてはいけない。

春香はベッドから起き上がった。眠る前より体が軽くなったような気がする。

「お腹、すいた。」

春香はぼさぼさの髪のをかきあげながら、つぶやいた。彼女はもう死のうなどとは思わなかった。もう、生きるしか無いのだ。生きるならする事がある。神に復讐するのだ。春香はあの男に、神に道具として弄ばれた。この世界も自分たちもすべて偽物なのだ。偽物なら、やろうと思えばなんだってできる。偽物が本物に成りれるのならりたい。

「なんでそんなことするの。いいじゃないの。今が幸せなんだから。」

世界に馴染み始めた頃、春香は一緒に来た絵理って子にこんなことを言われた。

「今が幸せだって。頭おかしいんじゃないの。」

春香は考えるよりも先に口から言葉が出てしまった。一度出たら止まらない。

「私たちの扱いは最初から何も変わって無いわ。勝手に連れてこられて、勝手に遊ばれて、勝手に元とは違う世界に入れられただけ。

本当に神は勝手だわ。家族とも会えないのよ。それが幸せだっていうの。おかしいわ。」

絵理はうつむき、何かを払いのけるように首を横に振った。

「家族と会えないのは寂しいけど。それは諦めるしかないわ。本当の私たちは他にいるもの。」

諦めたい気持ちは分かる。これまで沢山のものを諦めてきた。けど、そこが問題じゃない。

「他に居るって何処にいるのよ。それが必ず本物であるとは限らないわ。すべてが偽物かもしれない。私たちは今ここに居る。それだ

けが信じられることよ。」

風が二人の間を通り抜ける。春香は乱れる髪をかきあげた。

「だからするの。私は神に宣戦布告するわ。私たちの価値を考え直すさせるためにね。」

絵理は驚き、春香の肩を掴む。

「それをしたらただじゃ済まされないわよ。死んじゃうかもしれないわ。」

「大丈夫よ。私たちは偽物だもん。代わりは居るわ。だからやるのよ。」

春香はあくまで冷静だ。もう、迷いは無い。

「そんな事行っても。具体的にどうするのよ。」

具体的な行動に移すにはまずは計画が必要だ。春香は今考えていることを口に出した。

「まずはこの世界を出られるようにする。どのくらい掛かるかわからないわ。私の代じゃ終わらないかも。子供を巻き込むかもね。」

「そんな。そこまでして……。」

絵理は何も言わずじつと春香を見つめている。

「ここを出れば私が居た世界は見られなくても違う世界が見られるわ。あの男からも離れられる。それよりも、方法を考えないと。どうやったらできるのかしら。」

「無茶よそんなこと。無茶に決まってるわ。」

絵理の口から出たのは、計画を止めようとする言葉。

「やって見なきゃわからないじゃない。私はやるわ。やるしかないの。」

春香は弱音を一蹴する。もう決めたんだ。突き進むしか無い。

春香は色々試した。山を登ったり、世界の果てを目指して見たが外に行ける方法は見つからなかった。宇宙ならと思うがそもそも方法が無い上に、それは同じ世界であり別の世界では無い。

春香は何時もどこかに行っているためか、周りには冒険家のように思われた。

「そろそろそんな事やめて家庭を持ったら。たった一人ですつと居るつもりなの。この時代に無理なら次の世代に繋げるしか無いわよ。」

ある日、絵理は春香に告げた。二人ともあれから歳を重ねていた。絵理は既に結婚していた。春香が独身なのを心配してだろう。

春香は諦めその世界で家族を持った。そして、しばらくして妊娠する。生まれたのは男の子。名はレイ（零）。始まりと終わりを意味する。私の知らない事を一からやって欲しいから。

男の子が生まれた日。彼の泣き声は世界にひびを入れた。春香はこの子なら出来る。そう確信した。けど、彼には彼なりの未来がある。それを邪魔する気はない。

私は息子の成長が楽しみになった。彼女は何時かレイに希望を託そうと思った。

最終話 希望の少年

最終話 希望の少年

レイが成長するにつれ、やはり母親である春香も歳をとり昔の復讐を心の奥底にしまいこんでいた。

きっかけはレイがもうすぐ15歳になる事を知ったときだ。春香が昔住んでいたところでは15歳になると一人前の大人として見られる。いや、その時彼女が連れてこられたから余計覚えているのだろう。

レイの人生を縛りたくないが、一方で彼なら神への復讐が可能だと思えた。

レイが15歳になった日。春香は彼に静かにこれまでの事を話した。この土地のこと、彼女の過去、そしてあの実験のこと。そして、この世界に来てから今までのこと。実験についてはゲームと言いつた。何故かそれが一番良いと思えたからだ。

「知らないと思うけど、私が居た世界では15歳になると大人として認められたの。だから、ここからはあなた自身で自由に決めて良いわ。話はそれだけよ。」

言い終えて、レイは自分の部屋に戻って行く。春香は一人になって初めて気がつく。ただただ、春香はレイに自分の過去を押し付けているだけだった。

「やっぱり、言わなければ良かった。」

これはレイの誕生日に言うべきだったのだろうか。

次の日からレイは外に出かけては遅くに帰ってきた。食事中も何か考え事をしているらしく、聞くことも出来ずにいた。

それがある時、レイは嬉しそうに春香の前に駆け寄ってきた。久しぶりに彼の顔をしっかりと見たような気がする。

「お母さん。僕ね、外の世界に行けたよ。」

レイは外の世界に行けたことを春香に説明した。その中で見たものをうれしそうに語っている。彼女はその姿に言い知れぬ恐ろしさを覚えながら、極めて冷静に反応した。

「そう、別の世界に行けたのね。」

春香はあくまで冷静に応えた。ここは冷静に答えなければならぬところだ。

「これからどうするの。外の世界を知った以上、外に行きたいでしょう。」

春香は口に出してすぐに後悔した。レイの答えが聞きたくないけど、聞きたかった。

レイは頷いた。彼は春香が安心して住める世界を探してくると言った。

「僕が、母さんの望む世界に連れて行ってあげる。」

春香はレイにまっすぐ見つめられた。その眼差しに幾らかの罪悪感を覚え、目をそらす。彼の目を見られなかった。彼女が彼の日常を変えてしまったのだ。

その夜、春香は夫と一緒にテーブルを挟んでレイと向かい合った。レイは視線は宙を泳いでいたが何かを決めたのか春香たちを見た。彼は一度深呼吸すると、夫の前でこれまでの事を話し始めた。彼女から聞いた話と別の世界に行けたこと。夫相手に話をするというのは勇気がいるだろうと思った。夫はレイに対して何時も厳しいからだ。

夫はレイの話が終わると、春香を怒りだした。彼女は何も言えず視線を落とす。彼女の言葉がこんな結果を招いてしまったのだから仕方ない。

「ちょっと、やめて。母さんをいじめないで。」

レイは慌ててそれを止める。夫は黙りこみ、誰もしゃべらない時間生まれる。

夫が怒る気持ちは分かる。知らなければこの世界でみんな一緒に過ごせたんだから。けど、それが本当に幸せかどうかは分からない。「この世界でいいじゃないか。他の世界に行ったってここより良いという保障があるのか。下手をすれば戻ってこれないかもしれないだぞ。」

レイは夫を説得しようと、色々と言葉を並べる。しかし、今の夫にそんなものは通用しない。終わりの見えない言い争いが続く。春香はさらにテーブルの端で縮こまった。何故このような事をしてしまったんだろうと自問する。

「もう、勝手にしやがれ。とっととその別の世界とやらに行って、二度と帰ってくんな。」

夫は吐き捨てるように言うと自分の部屋に行ってしまった。春香はその後を追いかける。夫は寝室に座り込んでいる。彼女からは背中だけしか見えない。

「ごめんなさい。私がいけないの。私がレイにすべてを話したから。」

夫は春香を見てまた前を見た。

「もう、いい。何時かはこうなると決まっていたんだ。あいつが生まれた時から。」

夫が生まれたばかりのレイを抱き上げたとき、泣き声で世界にひびが入った。その時彼は思っただろう。何時かレイが自分の力にいき、それを使用する時が来ることを。

夫はそれ以上何も言わず。春香は彼の背中を見つめた。

太陽の昇りきらない朝。大きく開けた亀裂の前で、レイは春香たちや近所の人たちに別れを告げる。夫は彼女が連れてきた。嫌々言っているが、それ以上の抵抗はしなかった。

「ふん。勝手にしやがってたんだ。俺が居なくてもいいだろうが。」
夫はそれだけ言うと、何も言わずむすっとしている。春香は無言

で彼の脇腹を叩いた。そんな事しか言えないのか。痛そうにしているが気にしない。

場の空気を変えようと近所の人達が声をかけてくれている。

「とにかく行きっぱなしじゃなくて、必ず帰ってこいよ。帰ってこないとお母さんが心配するぞ。」

近所に住むおじいさんが声をかけている。他の人たちもその言葉に被せるように帰ってこいと言っている。

春香はポケットに手を入れる。そこにはペンダントがある。彼女はレイに近づき、ペンダントを取り出した。

「これを持って行きなさい。これがある限り、あなたと私は何時でも繋がっているわ。」

レイは春香からペンダントを受け取った。赤い石が付いたペンダントはキラキラと光っている。彼は礼を言っすぐ身につけた。

「お、おい。それってまさか。」

春香は笑顔で振り返り、夫を睨んだ。何も言うなという念を送る。彼が黙ったのでレイを見た。

「無理しちゃ駄目よ。何時でも戻ってきていいんだからね。」

レイは春香に頷く。彼は彼女があげたペンダントに触れている。

「ほら、あんたも何か言いなさいよ。子供じゃないんだから。」

夫を見れば、不機嫌な顔をしている。やっぱり、大切なペンダントをレイに渡したからだろうか。レイには彼女が身につけていたものを着けていて欲しいから仕方ない。

「レイ、いつてらっしゃい。」

レイは春香の声に押されるように一歩踏み出した。

春香は亀裂の先に消える息子を見ながら、無意識に手を伸ばしていた。

「おい、春香。泣くなよ、あいつは必ず戻ってくるさ。」

春香は泣いていた。声を押し殺し、ただ泣き続けた。

お願い、必ず戻ってきて。

私たちの価値

(上)

絶望の少女と希望の少年

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8900v/>

私たちの価値 (上) 絶望の少女と希望の少年

2011年9月4日03時22分発行